

里地里山型エコツーリズムの現状と今後への一私案

——飯能市を事例に——

平井純子

I はじめに

マス・ツーリズムに対する批判を背景に普及が進んだエコツーリズムは、1992年の国連地球サミットでの「持続可能な開発」に後押しされるようにさらに広まった。21世紀に入り、日本国内では政府により観光開発が重視されると、衰退しつつある地方の地域活性化の起爆剤として、多くの地方自治体がエコツーリズムに乗り出すようになった。エコツーリズムが注目されつつある中で、その研究は増加傾向にある。日本におけるエコツーリズムの牽引役であり、実践的なエコツーリズム研究者である海津ゆりえや真板昭夫¹⁾は、地域づくりに主眼をおいた日本型エコツーリズムを提唱し、日本でのエコツーリズム普及に尽力、大きな影響力を与えてきた。敷田(2008)もまた地域からの視点で実践的なエコツーリズム論を展開する。森重(2008)は海外ではエコツーリズムの内容や質に関する議論が中心であるのに対し、日本ではエコツーリズムによる地域振興に関心をよせると指摘する。日本におけるエコツーリズムに関する研究は地域づくり、あるいは地域活性化のための成功事例紹介、エコツーリズム活用法のような実践的なものが多くみられ、これが主流となっている。一方で、エコツーリズムを導入した地域で起こる問題については、適切な手法で遂行しないがための問題であるとの認識で片づけられかねず、現場で実際に何が起きているのかが見えなくなってしまう(古村2011)可能性がある。理論と現実との乖離については直視しない傾向があり、ゆえにエコツーリズム導入地域の導入後の経過の検証が十分になされているとはいえない現状にある。

2008年、エコツーリズム大賞²⁾を受賞したことにより注目を浴び、各地から多くの視察が訪れるようになった飯能市エコツーリズムは、今や飯能市にとって、無くてはならない要素の一つとなりつつある。大野(2008)は市職員としての立場から、飯能市におけるエコツーリズムについて現場サイドに立った実践的な視点で考察した。また犬井(2008)は森林資源と林業について述べる中で、林業再建の一助となる可能性のあるエコツーリズムの実践事例として飯能市を取り上げている。先進事

例となりつつある一方で、その実態ははまだ発展途上の段階にあり、これからの運用、あるいは展開次第で、今後の命運は大きく分かれるであろうと想定される。そこで本稿では、里地里山型エコツーリズムの事例として飯能市の現状について概観し、その問題点を指摘したうえで、今後の戦略および展望について、私案を示そうと思う。

II 飯能市エコツーリズムについての概要

飯能市は都心から50キロ圏内に位置し、里山の豊かな自然と歴史や生活文化にあふれる、人口約82,000人の都市である(図1)。「森林文化都市」宣言をしており、市域の約75%が森林となっている。かつて、当該地域は西川材の主たる供給地として林業で成り立っていたが、昭和30年代以降の林業不振により、日本の他の林業地と同様、森の活用が停滞している現状にある。

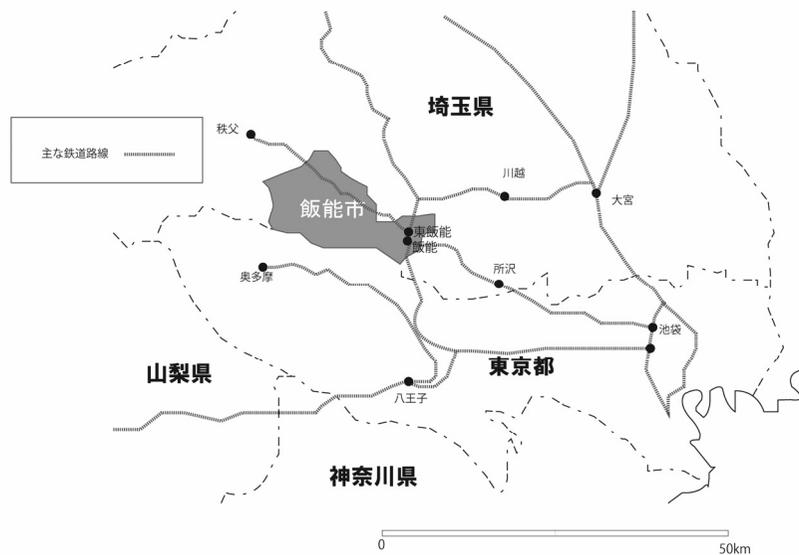


図1 飯能市の概要

エコツーリズムへの取り組みへのきっかけは、年間250万人もの観光客が訪れているものの、その大半が地域と関わりをもつことなく帰っていく状況の中で、自然環境への悪影響ばかりが目立つこと、また、中心市街地の活力低下や山間地域の過疎化、さらには森の荒廃など、複数の要因が負のスパイラルを形成しつつあったこと

にある。地域を活性化したい、経済振興につなげていきたいと手段を模索していた2004年3月、環境省によるエコツーリズムモデル事業の募集があった。①原生的な自然など豊かな自然の中での取り組みを行う地区、②多くの観光客が訪れる観光地での取り組みを行う地区、③里地里山など身近な自然、地域の産業や生活文化を活用した取り組みを行う地区という3つの地区類型のうち、飯能市は③のタイプのモデル地区として、宮城県田尻地区や長野県飯田地区などの地区とともに選定された。これに伴い、飯能市では同年7月に環境緑水課にエコツーリズム専属部署を置き、10月に「飯能・名栗エコツーリズム推進協議会準備会」を設置、翌2005年3月までに5回の会議やシンポジウムを開催するなど、エコツーリズムの推進に向けて大きく動き出した(表1)。2005年から、エコツーリズムの基礎的な知識や飯能・名栗の歴史、文化、ガイド技術を学ぶための講習会であるオープンカレッジが開始された³⁾。また、修了後の活動の場として、飯能市エコツーリズム活動市民の会(以下、活動市民の会)が発足した⁴⁾。2006年には活動市民の会会員の交流や情報提供を目的として、ニュースレター「飯能市エコツーリズム通信」が創刊され、その後年4回発行されている。この年からホームページが開設され、webを通じた情報発信が行われるようになった。またこの時点ですでに、モデル事業後の将来を見据えた組織・制度のあり方について、検討を行っている。2007年にはエコツアー実施者の交流会が開催され、NPO法人としてエコツーリズムセンターを立ち上げることやエコツーリズム基金といった制度への検討がなされた。一方、先に発足した活動市民の会主催のエコツアーが始まり、実際に4本のエコツアーが実施された⁵⁾。2008年には里地里山の身近な自然、地域の産業や歴史、生活文化を活用したエコツーリズムを実践してきたことが評価され、環境省が優れた取り組みを表彰する「第4回エコツーリズム大賞」を飯能市が受賞することとなった。受賞以前から徐々に視察が訪れるようになっており、エコツーリズムのまちとしての飯能の認知度が高まっていった。2009年には前年に施行されたエコツーリズム推進法に基づく飯能市エコツーリズム推進全体構想を策定し、認定を受けた。これは全国認定第1号となり、飯能市のエコツーリズムに対する取り組みをさらに広く周知させることとなった。同年、かねてから議論されていたエコツーリズムセンター設立の準備委員会が設置され、NPO化に向けて大きく動き出した。しかしながら翌2010年、議論及び調整不足としてNPO化するには時期尚早との判断がなされ、見送られることとなった⁶⁾。2011年からは環境省の平成23年度地域コーディネーター活用事業を活用した6つのモデルツアー⁷⁾が企画・実施され、それぞれにある程度の成果をあげている。

表1 飯能市エコツーリズム推進事業の概略

年度		事項	ツアー企画数	全参加者数(人)
2004	平成16	エコツーリズム推進モデル地区指定	2(モデルツアー)	—
		飯能・名栗エコツーリズム推進協議会準備会設置		
		モデルツアー、シンポジウム実施		
2005	平成17	飯能市エコツーリズム推進協議会設置	10	481
		エコツアーの企画・実施		
		オープンカレッジ開始		
		活動市民の会発足		
2006	平成18	ニュースレター創刊	54	1918
		エコツーリズムセンター、エコツーリズム基金の検討		
		ホームページ開設		
2007	平成19	実施者交流会	68	2045
		活動市民の会主催ツアー開始		
2008	平成20	第4回エコツーリズム大賞受賞	70	1982
		第16回全国雑木林会議 in 飯能開催		
		視察受け入れ開始		
2009	平成21	飯能市エコツーリズム推進全体構想認定(全国第一号)	80	2820
		エコツーリズムセンター設立準備委員会設置		
2010	平成22	NPO 法人設置見送り	91	2720
2011	平成23	地域コーディネーター活用事業に基づくモデルツアー企画・実施	121	2006
2012	平成24	西武線沿線サミット	135	3299

Ⅲ 飯能市エコツーリズムの現状

飯能市エコツーリズムの運営のしくみを順に述べると以下のとおりである。

基幹組織となる飯能市エコツーリズム推進協議会（以下、協議会）の委員は26名で⁸⁾、学識経験者、自治会等の関係者、商店街等の関係者、観光事業の関係者、農林業の関係者、自然保全・環境保全等の活動または文化財保護・伝統芸能保存その他の文化活動をしている者、環境省、農林水産省、国土交通省、埼玉県の関係行政機関職員、飯能市から構成されている（図2）。協議会の役割として、エコツーリズム全体構想の作成および変更の審議やエコツアー実施団体から提出される企画内容

のチェック、エコツーリズムの普及啓発についての協議のほか、国の交付金や市の補助金による推進体制あるいは全体構想の見直し、モデルツアーの企画・実施・人材育成がある。協議会の事務局として機能しているのは、飯能市役所環境部環境緑水課に設置されたエコツーリズム推進室（以下、推進室）で、3名の職員が担当している。事務局は実施団体が行うエコツアーの実施支援や企画の事前チェック、エコツアーの下見およびエコツアーへの同行、エコツアーガイド養成講座の実施運営、

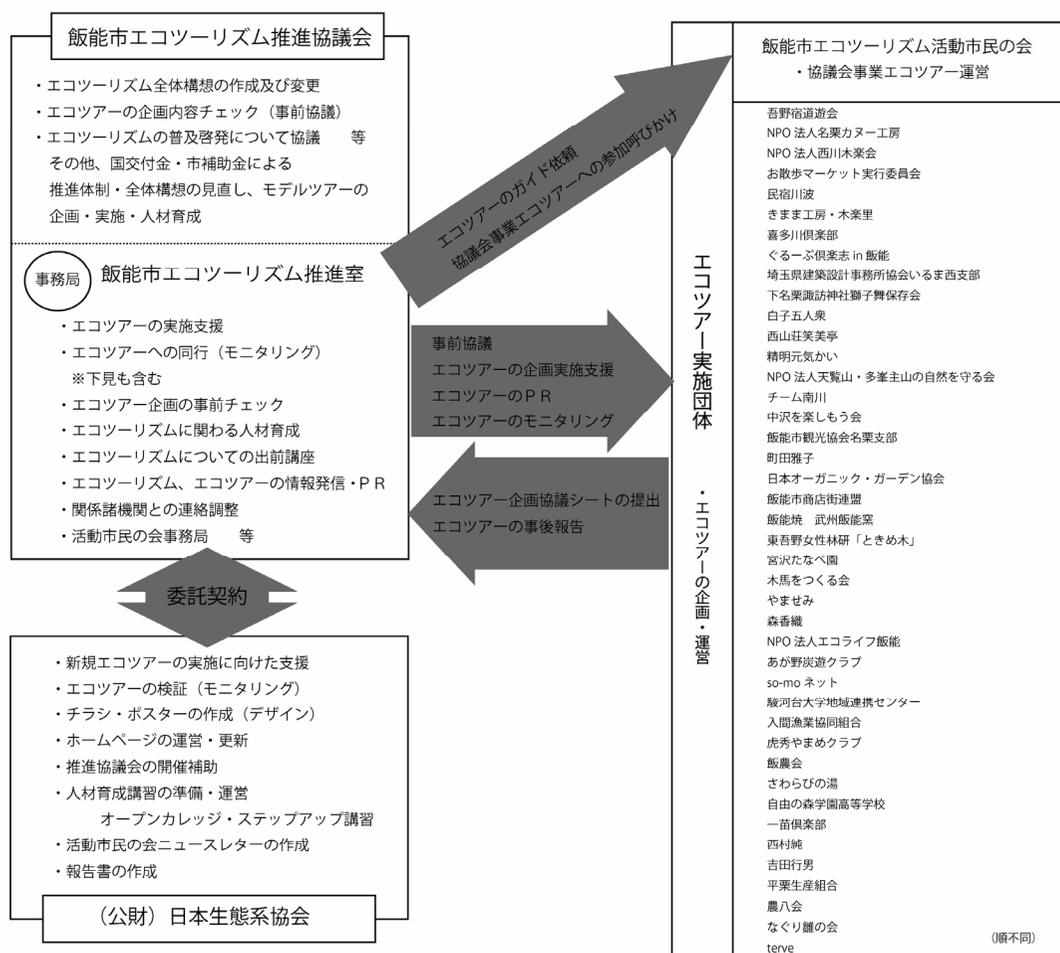


図2 飯能市エコツーリズム推進の組織図

（飯能市エコツーリズム推進室への聞き取りにより作成）

エコツアーについての出前講座，ホームページや SNS を通じた情報の発信・PR，関係諸機関との連絡や調整，視察依頼が入った際にはガイドの人選と同行，モデルツアー実施にあたっては活動市民の会を中心に参加を呼び掛けるほか，活動市民の会の事務局にも担っており，その業務は多岐にわたっている。協議会に課される役割については外部委託⁹⁾をしており，現在は公益財団法人日本生態系協会が担っている。新規エコツアーの実施に向けた支援，エコツアーの検証，効果的なチラシやポスターの作成，協議会開催の補助，人材育成講習の準備・運営，活動市民の会ニュースレターの作成，そして年次報告書の作成といった業務で，飯能市エコツアー開始時よりその推進事業に深く関わっている。

エコツアーの実施団体は42団体¹⁰⁾で，NPO 団体や任意団体，民間企業，宿泊施設，など多岐にわたっている。エコツアーを実施する際は，実施団体が協議会に対し，エコツアーの目的や実施する場所，使用する施設，ガイド担当者，タイムスケジュール，エコツアーを実施することによる効果などの詳細を記した企画・協議シートを提出する。そして，事前チェックを受け，必要に応じエコツアーの内容を改変・修正したうえで下見をし，エコツアーを実施する。実施後は実施団体と推進室職員が振り返りシートを作成し，協議会に報告する，という手順をとる。

飯能市エコツアーの概念に基いて行われるエコツアーの実施数は年々増加しており，これに比例し参加者数も増加している¹¹⁾ (図3)。一方で，飯能市エコツアーの基本方針として，「すべての地域と住民の参加」でのエコツアー実施を掲げているが，表2によると，平成24年度は吾野地区で0となったほか，飯能市内全8地区のうち5か所で前年よりもツアー企画数が減少した。同時に中心市街地とその周辺である飯能地区では大幅に増加しており，ツアー実施地域の偏りが広がりつつある。

里地里山型エコツアーの現状と今後への一私案
 ——飯能市を事例に——

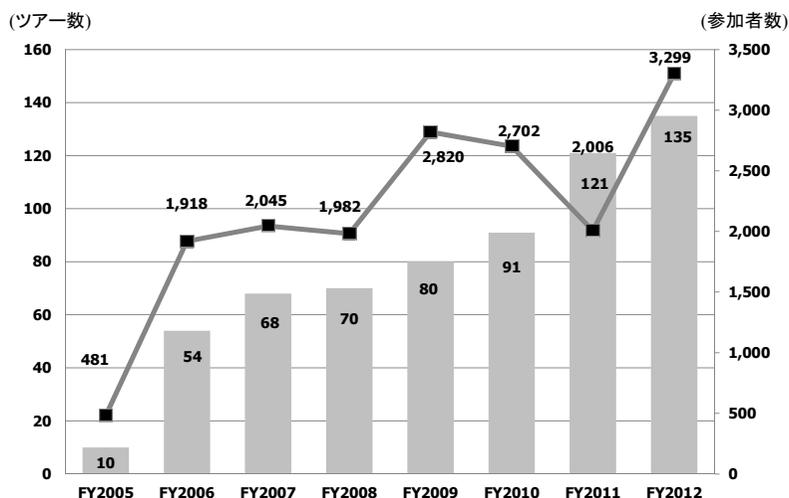


図3 飯能市におけるエコツアー数と参加者数の推移

(飯能市エコツアー推進室による講義資料(2013年6月10日実施)を引用)

表2 飯能市内の地区別エコツアー実施数

地区名	24年度	23年度	増減
飯能	43	33	↑
加治	16	18	↓
名栗	13	16	↓
東吾野	12	10	↑
精明	9	11	↓
南高麗	3	2	↑
原市場	1	2	↓
吾野	0	4	↓

実施されているエコツアーのテーマをみると(図4)、自然や生き物の観察をテーマとする自然型と、地域の風土を活かした衣食住の文化をテーマとする生活文化型が多くみられる。開始以降全体の傾向の変化はないが、個々のエコツアー内容については多様化が進んでおり、それぞれの実施団体の工夫が垣間見られる^{1,2)}。

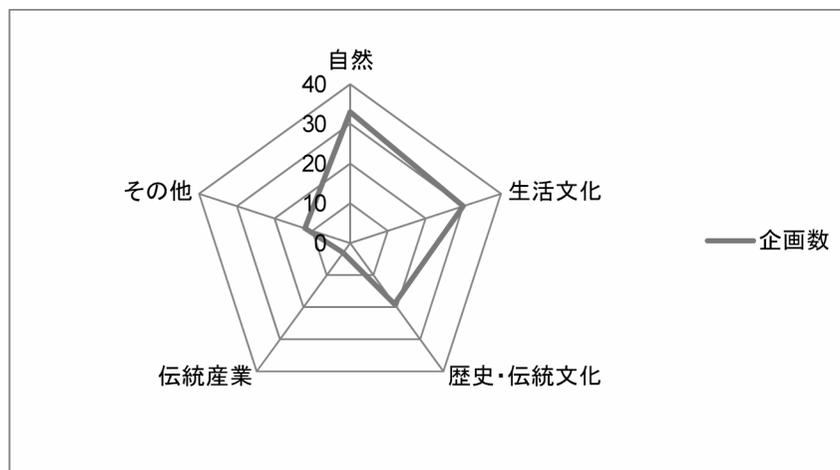


図4 飯能市におけるエコツアーのテーマ (平成24年度実施エコツアー)

以上のように、飯能市ではエコツーリズムを円滑に機能させるために必要な基礎的要素は、既に整備されている。しかしながら、年々増加するエコツアー企画に伴い、事務局である推進室の業務負担は増大しており、業務の軽減が必要な状況にある。事務局の負担だけでなく、持続可能な体制づくりのためには、組織の再構築等、検討が必要である。

さらに、これまでに何度か議論を経て将来像を描いてきているものの、未だそのシステムが未成熟であるため、機能的に動いているとはいえない体制であることは否めない。例えば、協議会の形骸化、エコツアー実施数の増加による推進室の業務負担の増大、外部委託業者の志向に偏りがちな推進体制などがあげられる現状にある。裏を返せば、システムの改善、修正、効率化を図れば、伸び代が大いにある部分でもある。推進室のこれからの役割を整理し、協議会を発展の土台としつつ、活動市民の会を活動の中核として活用するなど、将来像をもって発展させていくことが肝要となる。また、エコツアー実施団体相互間の関係が希薄で、接点をもつ機会が少ない。お互いの活動を理解し合う機会を積極的に設けることも必要であろう。

IV エコツーリズム推進組織の再構築

活動市民の会は、飯能市エコツーリズムの中核的な組織として機能することを期待され発足した。しかし、現在の活動市民の会には会長や代表が設置されておらず、会則や規約などもない。飯能市エコツーリズムオープンカレッジを修了し、希望すれば入会が可能である。2013年3月現在会員数は106名であるが、実際に活動しているのは20名前後である。2006年発足当時はエコツーリズムの普及・啓発をはじめ、地域の資源発掘やお土産物の開発などを含め、エコツアーガイドだけでなく、幅広い役割を期待されていたものの¹³⁾、現在、モデルツアーの運営やエコツアーの企画・運営にとどまっている。その理由として、会員が活動市民の会の目的を理解していない(目的が明確に示されていない面もある)、活動したくてもどこに相談したらよいか分からない、コミュニケーションがとれない、など複数の要因をあげることができる。2012年度は会の活性化を目的に意見交換会や勉強会が設定されたが、開催頻度が低いために効果的であったとはいえなかった。このため自律的に活動することができる場を設け、コミュニティを構築することを目的に、2013年4月より2週間に一度のペースで活動市民の会自主勉強会が開始した。活動頻度や活動日時、場所については検討の余地があるものの、活動開始を評価したい。今後は、第一段階としては、エコツアーガイド以外の役割設定、例えば、当初想定されていた役割のほか、現在エコツーリズム推進室が行っているエコツアーの同行及びそのレポートの作成をしたり、自然観光資源の巡視や管理を担ったりするなど、協議会の事務局である推進室業務のサポートを行える組織としたい。当面は推進室が活動を全面的に先導しなくてはならないが、徐々にサポートの比重をあげ、第二段階としては、NPO法人や株式会社などとして、飯能市エコツーリズム運営団体として独立できる体力をつけていきたい(図5)。そのために必要な人材を掘り起こし、育成することが急務である。一方で推進室は、これから当面は推進組織体制作りのコーディネーターとしての比重を上げること、また将来的には飯能市エコツーリズム運営団体への出向が考えられるが、飯能市エコツーリズムのシステムのあるべき姿が定まっていない現在、まずはエコツーリズム推進業務のスリム化、すなわちルーチンワークの効率化や一部業務の活動市民の会への振り分けなどを進めていくことから始める必要があるものと思われる。

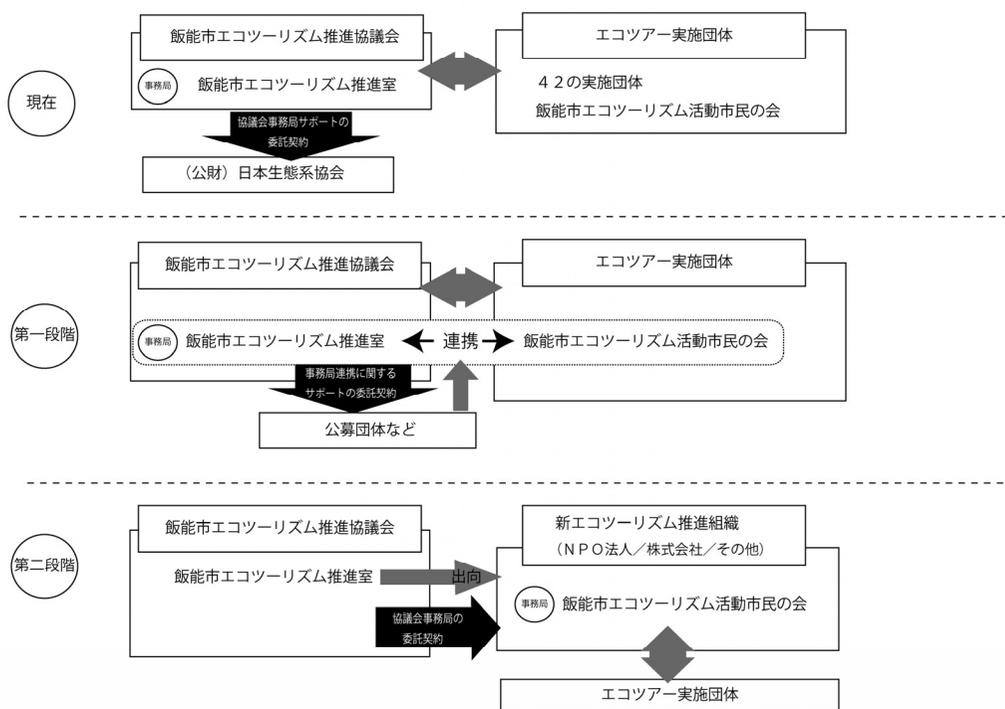


図5 飯能市エコツーリズムの再構築 私案

V 飯能市エコツーリズムの今後の展開について

ここでは飯能市エコツーリズムのシステムのあるべき姿の構築にあたり、考慮すべき事項について、具体例を示す。

1. 飯能市のイメージ戦略

2013年春学期に駿河台大学現代文化学部の講義「飯能学」を履修した学生に対し、「飯能はどのようなイメージか?」というアンケート¹⁴⁾を実施したところ(図6)、「自然が豊かである」が圧倒的に多く、次いで、「田舎である」と答えた。また、西武池袋線でダイレクトに池袋にアクセスできるにもかかわらず、「交通の便が悪い」と答えた学生が23名いた。飯能市エコツーリズムが使用する「すぐそばのふるさとでお待ちしています」というキャッチフレーズがある。田舎で自然豊かというイメージには合致するが、実際のアクセスは「すぐそば」である一方、飯能が都心から遠いというイメージが払拭できていない状況にある。

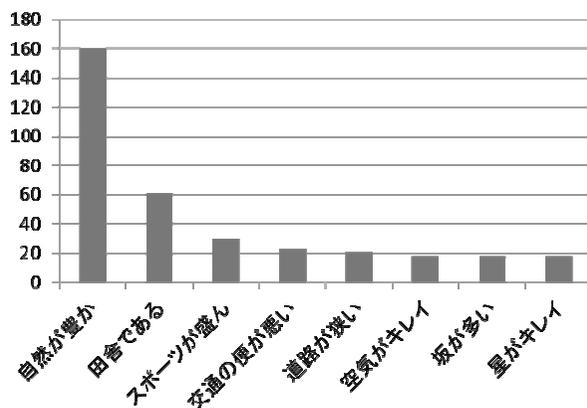


図6 駿河台大学現代文化学部生の飯能イメージ

また、飯能でエコツアーに参加することで「〇〇に貢献できる／している」というイメージがない。今後、そのイメージを作って売り込むべきである。飯能市は全国的な知名度が高いとは言えず、ゆえにこれといったイメージをもっていない。埼玉県内や近県からみると「田舎」というイメージが強いが、里地里山でエコツーリズムに取り組むに当たってはこのイメージは大変有利に働く。すぐそばのふるさと＝近くて手軽に田舎体験、というイメージづくりと広報が有効となる。観光資源、観光情報の見直しを行い、イメージを具現化するための標準デザインを設定するなど、イメージの定着を図る取り組みが必要となる。

都市計画の面からみると、ユニバーサルデザインを意識した町づくりは必須であり、駅、中心市街地、道の駅などの拠点をはじめとする施設では、誰でも説明なしで一定レベル楽しめる分かりやすさと利便性の向上が必要となる。そして、より深い楽しみへ、楽しみ方のレクチャーを実施するのがエコツアーの役割となる。豊かな自然や歴史、文化を体験していただくことで「飯能ファン」を創出すること、産業体験や産物提供によって農林水産業が連携すること、そして飯能全市民が参加するような仕組みが出来れば、真の意味でエコツーリズムによる地域活性化が可能になる。なお、そこに「田舎」のイメージを演出することを忘れてはならない。

2. 飯能市エコツーリズムの目的や目標の共有

飯能市エコツーリズムの関係者すべてが、飯能市エコツーリズムの目的や目標を

共有することが重要である。最終的な目的は飯能市の活性化であり、具体的には農林水産、観光、史跡活用、教育、都市整備、景観づくり、市民活動などの活性化である。そのためにそれぞれに具体的な目標を立てて進める必要がある。一方で対外的に評価される数値目標も大事にする。絵にするなどイメージしやすい手法で共有できるとよい。決して自己満足に陥ることなく、常に結果の反省からフィードバックしていくことが肝要である。

3. 既存事業のエコツアー化

飯能市役所内の各部署主催の事業、あるいは市内の体験活動等の既存事業は多くみられるが、これらは個別の目的意識から行われており、その内容の質は大きく差があり、また相互に関連性をもつことはみられない。これら飯能で行われるすべての体験型活動をエコツーリズムの概念に基くエコツアーとする(図7)。例えば現在、市役所内各部署での催しや小・中学校の遠足、天覧山谷津の里づくりプロジェクト等の活動があるが、これらをすべてエコツアー化していくのである。ツアー内容を審査し、エコツアーとしての基準をクリアしたものを「飯能市エコツアー」としてブランド化¹⁵⁾していく。その際、エコツアー化することによるメリットの明示が必要となる。エコツアーの質の担保をはじめ、一元的な広報の場の提供をする、などが考えられる。また飯能市民へのエコツーリズムの浸透と理解の深化のために、市民向けのエコツアーの設定が求められる。これに伴いホームページの対応や広報用のロゴマークの作成などの整備を行う。これらの作業により、情報の一元化によるホームページの実用性の向上が図れ、市役所内においては、事業実施主体や担当部署の対外的な PR、ひいては市行政の PR が可能となり、既存事業のエコツアー化による質の向上、さらには催行するエコツアー数の確保などの大きなメリットがある。また、市の役割と市がエコツーリズムに取り組むことは重複する部分が多いため、市役所内各部署をエコツーリズム活動団体のひとつとし、エコツーリズムを市の業務にあたっての基本事項として通知し、市役所から共通認識を醸成する。

里地里山型エコツアーの現状と今後への一私案
 ——飯能市を事例に——

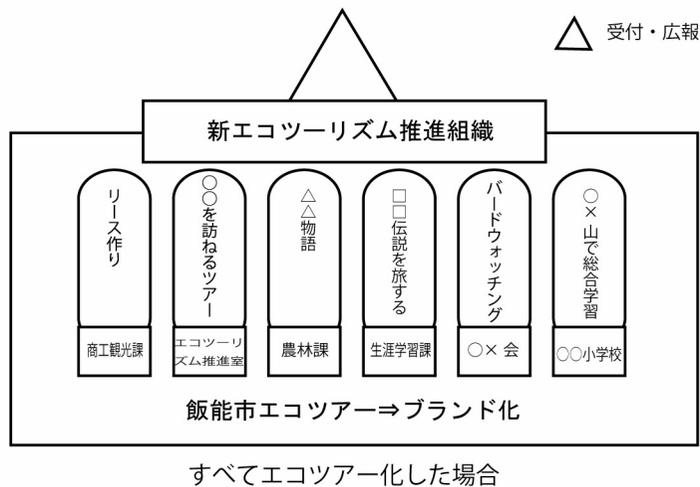
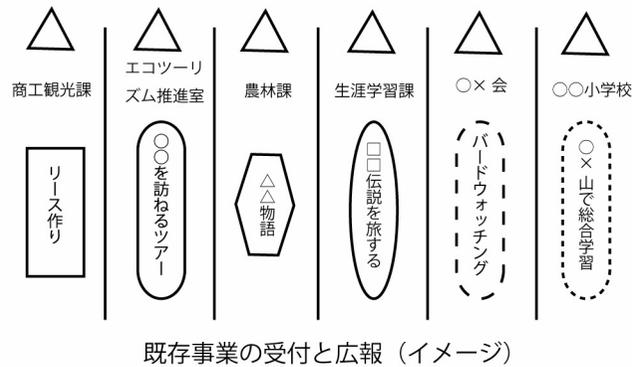


図7 既存事業のエコツアー化イメージ

4. エコツアーリズム資源の運用

エコツアーリズムとこれに関わる資源は多様である。自然資源はもちろんのこと、歴史や生活、食などの文化に関するもの、あるいは、トレイル、案内板などの標識などのインフラもこれに関連することになる。しかしながらそれぞれの資源に関わる管轄は縦割り行政のなかで細分化されており、維持管理のための現況把握がスムーズとはいえない。一方で、エコツアー実施者は下見などの際にこれらの資源についてチェックし、現況把握することは可能である。エコツアー実施者が把握した現

状をエコツアー推進室で集約し、案内の内容を充実させたり、デザインを統一したりするなどの調整を行ったうえで、担当課に通達し、それぞれが管轄する対象に対し責任をもって維持管理を指導し、向上改修依頼を行う流れをつくる(図8)。市民の活動により市域の各種資源の質の向上が大いに期待できるとともに、責任の所在が明確化するという効果がある。

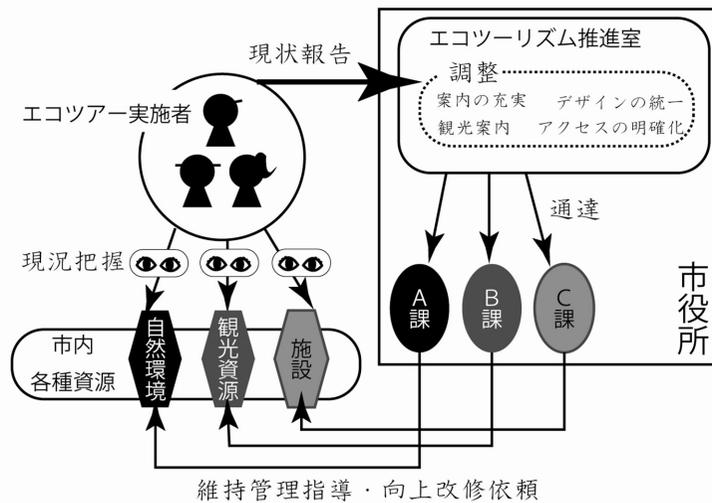


図8 エコツアーリズム資源の運用イメージ

5. 資格制度の導入

現在の仕組みでは、年一度行われるオープンカレッジを修了すればだれでもエコツアーガイドになれる。しかしながら、その資質や知識量は均一ではない。そこで、飯能市エコツアーリズムのテキストを作成し、これに基いた資格制度を導入する。例えば、1～3級に分け、理解すべき事項を明確化し、ペーパーテストで理解の度合いを可視化する(表3)。各地で〇〇学として地域学を学習している自治体や組織などがあるが、大学などと連携し、活動市民の会が主体となって、テキスト作りも可能であろう。また、将来的には一般向けの検定へと発展させ、検定料収入を活動市民の会の運営資金とすることもできよう。

表3 資格制度イメージ

級	理解すべき事項	クリアするとできること
1	飯能以外のエコツアー事例を理解（飯能以外のエコツアーに参加、学習）	エコツアーの指導ができる、活動市民の会の企画運営ができる
2	様々な飯能市エコツアーの形態を理解（飯能市エコツアーに複数参加）	エコツアーの評価ができる、活動市民の会の企画運営のサポートができる
3	基本（＝手引き）の理解（飯能エコツアーとは、ガイドとは、活動市民の会とは）	活動市民の会への登録や飯能市エコツアーガイドができる

6. 優良なエコツアー実施団体の表彰

現在、アンケートなどでエコツアーの内容を評価しているが、優良なエコツアーを実施した団体に対し、いくつかの категория に基いた表彰を行う。取り組みを透明化するとともに PR でき、実施団体のやる気の創出や話題づくりともなる。表彰された団体は特別なロゴを使う権利ができるなど、優遇したい。

そのために、飯能エコツアーリズムとエコツアーのロゴタイプを作成する。ねらいは、わかりやすさの向上のほか、露出頻度を増やしより身近にすることである。特別なロゴだけでなく、「活動市民の会主催エコツアー」や「飯能市エコツアーリズム認定団体エコツアー」など実施団体ごとのロゴや、「市民向けエコツアー」、「自然」「歴史・伝統文化」「生活文化」「伝統産業」等の系列ごとに作成する。広報やパンフレット、チラシの詳細案内時のタイトルに明記し、広報のフッターの凡例に追加するなど、その汎用性は高い。

VI. おわりに

本稿では飯能市エコツアーリズムの現状について概観し、その問題点を指摘したうえで、今後の戦略および展望について考察し、飯能市エコツアーリズム推進組織の将来像の可能性の私案として具体例を示した。

2013年度は飯能市エコツアーリズム全体構想を送り出してから5年が経ち、見直しの時期を迎えている。飯能市エコツアーリズムのこれからを見据えた中長期的なロードマップが必要となる。現在の全体構想に記載される抽象的な表現を、より具体化する必要がある。

飯能市は「森林文化都市」宣言をしているが、エコツアーリズムを日常化し、身近

なものとするために、これと同位で「エコツーリズムのまち宣言」をするのも一案であろう。市が担う既存事業がエコツアーになることで身近になり、親しみがわく、地元をより知るために検定を受ける、など取り組めば良い流れになるような仕組みを構築できれば、真の意味での地域活性化につながる。

飯能市エコツーリズムは対外的にはエコツーリズムの先進地として名をはせているものの、そのシステムは未だ発展途上であり、クリアしていくべき課題は多い。現在、エコツーリズムに取り組む自治体や団体は多くあり、そのシステム構築や運営は千差万別である。今後の全国のエコツーリズムの行方をみる上でも、里地里山型エコツーリズムの先進地である飯能市のこれからの動きは注目されていくであろう。本稿では、飯能市を事例にエコツーリズムを推進していく上での体制や枠組について考察した。さらに質の高いエコツーリズムを模索するため、エコツアーの実施内容についての分析を、今後の課題としたい。

本研究では、飯能市エコツーリズム推進室室長大野悟氏に多大なるご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。本稿の内容は2013年日本地理学会秋季学術大会（於：福島大学）で報告した。

引用・参考文献

- 愛知和男・盛山正仁（編）『エコツーリズム推進法の解説』2008 ぎょうせい
- 犬井 正「森林整備の展開と農山村の振興—埼玉県飯能市の着地型エコツーリズム—」（森林技術 No. 800 2008） pp. 18-24
- 大野裕司「飯能市におけるエコツーリズムの展開（生物多様性からみた自然公園のツーリズム）」（国立公園（682）, 2010） pp. 7-10
- 古村 学「エコツーリズム研究」『観光研究レファレンスデータベース・日本編』（ナカニシヤ出版 2011） pp. 82-93
- 海津ゆりえ 『日本エコツアー・ガイドブック』岩波書店 2007
- 海津ゆりえ・真板昭夫 「What is Ecotourism エコツーリズム推進協議会（編）『エコツーリズムの世紀へ』（エコツーリズム協議会1999） pp. 18-34
- 海津ゆりえ・真板昭夫 「西表島におけるエコツーリズムの発展過程の史的考察」石森秀三・真板昭夫（編）『国立民族学博物館調査報告 23—エコツーリズムの総合的研究』（国立民族学博物館2001） pp. 211-239

- 海津ゆりえ・真板昭夫 「第二世代を迎えた日本型エコツーリズムの課題と展望に関する研究 西山徳明(編)『国立民族学博物館調査報告51—文化遺産マネジメントとツーリズムの現状と課題』(国立民族学博物館2004) pp. 211—227
- 環境省・日本交通公社(編) 『エコツーリズム—さあ、はじめよう!』日本交通公社2004
- 敷田麻実(編)『地域からのエコツーリズム—観光・交流による持続可能な地域づくり』学芸出版社2008
- 飯能市・財) 日本生態系協会『平成16年度 飯能・名栗エコツーリズム推進モデル事業業務報告書(概要版)』2005, 66p
- 飯能市・財) 日本生態系協会『平成17年度 飯能・名栗エコツーリズム推進モデル事業業務報告書(概要版)』2006, 104p
- 飯能市・財) 日本生態系協会『平成18年度 飯能・名栗エコツーリズム推進モデル事業業務報告書(概要版)』2007, 77p
- 飯能市・財) 日本生態系協会『平成19年度エコツーリズム推進事業業務委託報告書』2008, 116p
- 飯能市・財) 日本生態系協会『平成20年度飯能・名栗地区エコツーリズム推進事業業務報告書』2009, 78p+62p
- 財) 日本生態系協会『飯能・名栗地区エコツーリズム推進事業業務報告書』2010, 93p
- 飯能市・飯能市エコツーリズム推進協議会『平成23年度 飯能市エコツーリズム推進事業報告書』2012, 230p
- 飯能市・飯能市エコツーリズム推進協議会『平成24年度 飯能市エコツーリズム推進事業報告書』2013, 227p
- 真板昭夫・比田井和子・高梨洋一郎 『宝探しから持続可能な地域づくりへ—日本型エコツーリズムとはなにか』学芸出版社2010
- 森重昌之「エコツーリズムの誕生と広がり」敷田麻実(編)『地域からのエコツーリズム—観光・交流による持続可能な地域づくり』(学芸出版社2008) pp. 29—62

1) 海津・真板(1999, 2001, 2004), 真板・比田井・高梨(2010), 海津(2007)など。

2) 環境省が定めたエコツーリズム推進の5つの方策のひとつ。エコツーリズム推進のために、エコツーリズムを実践する地域や事業者の環境への配慮や地域づくり等の優れた取組を表彰し、更なる質の向上や継続への意欲につなげるとともに、関係者の連携、情報交換などによる連帯意識の醸成を図ることを目的(環境省HP:

<http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/env/5policy/index.html>)としており、飯能市は第4回エコツーリズム大賞で最高賞を受賞した。

³⁾ 30名の募集に対し37名の申込みがあり、このうち、5回すべての日程に参加し、終了したのは26名であった。

⁴⁾ 飯能市(2005)によると、28名が登録した。

⁵⁾ 2008年2、3月に行われた。内容は「木と絹と鉄道のまち飯能」「飯能武人を訪ねて」「魅力新発見!里山お散歩ツアー」「ふるさとの酒と杜氏の心にふれる旅」の4企画であった。

⁶⁾ この一件により、設立当初からの会長が辞任した。

⁷⁾ 2011年度は、里活として「山のおばあちゃんの干し柿づくり」「主婦パティシエと行く!山のゆず狩り」、「飯能まつりをもっと楽しむ達人ツアー」「名栗シカウォッチング」が実施され、2012年度は「入間川リバーウォーク」「体験型遠足・はんのう里山体感ツアー」が実施された。

⁸⁾ 平成25年9月現在

⁹⁾ 随意契約。

¹⁰⁾ 推進室の名簿上にはさらに多くの団体名があるが、現在活動のないものについては、数にいない。また、この数字に含まれる団体であっても、現時点で活動を休止している団体がある。

¹¹⁾ 2011年は東日本大震災の影響により、飯能市エコツーリズムの中で一番の集客がある南高麗地区での「お散歩マーケット」が中止されたことに伴い、参加者数が大幅に減少しているものである。

¹²⁾ 飯能市エコツーリズムの年度ごとの推進事業報告書は毎年3月にまとめられているので、詳細はそちらへ譲る。

¹³⁾ 飯能市(2005)による。

¹⁴⁾ 2013年春学期の講義の冒頭で、「飯能はどのようなイメージか」を1人につき5つ書き出させた。自由回答のため、100を超えるイメージが寄せられたが、多いものから8つを取り上げた。スポーツが盛ん、との回答は被験者に現代文化学部のスポーツ文化コースに所属、あるいは志望の学生が多かったためと考えられる。

¹⁵⁾ 飯能市エコツーリズムをブランド化していくことで、地域産業を、また体験の場を通じた精神的な価値と結びつけていく。この地に住みたいというニーズを基盤とした、飯能アイデンティティの形成を目指す。